



新藤兼人賞

SHINDO KANETO AWARDS



第 17 回新藤兼人賞

2012 年 12 月 7 日（金）東京會館 11 階 ゴールドルーム

主催：協同組合 日本映画製作者協会

協賛：松竹株式会社/東宝株式会社/東映株式会社/株式会社角川書店

富士フイルム株式会社/報映産業株式会社/株式会社 IMAGICA/株式会社ファンテック

ソニービジネスソリューション株式会社/ブロードメディア株式会社

金 賞

赤堀雅秋『その夜の侍』監督・脚本



受賞者プロフィール 1971年、千葉県出身。劇作家、脚本家、演出家、俳優。96年劇団 THE SHAMPOO HAT を旗揚げし、作・演出・俳優の三役をこなす。人間の機微を丁寧に紡ぎ、市井の人々を描くその独特な世界観は赤堀ワールドと称され、多くの支持を集めている。近年は、青年座本公演『蛇』（磯村純演出）、PARCO プロデュース『LOVE30』（作・宮田慶子演出）、フジテレビ『殺人者』（作・演出・出演）、自転車キンクリート STORE『富士見町アパートメント』（鈴木裕美演出）などの外部公演や、2010年旗揚げの劇団『姦し』の作/演も手がける。TVドラマ『週刊・真木よう子』の脚本も執筆。俳優としても映画『実験四号』（監督・山下敦弘）、『ぐるりのこと』（監督・橋口亮輔）、『シーサイドモテル』（監督・守屋健太郎）、『モテキ』（監督・大根仁）や、TVドラマ『鈴木先生』『モテキ』などに出演し、その活動は多岐に渡る。劇団本公演『津田沼』『その夜の侍』『砂町の王』が第51回、第52回、第55回岸田国土戯曲賞最終選考作にノミネートされている。次回本公演は2013年4月を予定。

銀賞

蜷川実花『ヘルタースケルター』監督



受賞者プロフィール 映画監督・フォトグラファー。映画『さくらん』（第57回ベルリン国際映画祭、第31回香港国際映画祭特別招待作品）にて長編映画監督デビュー。1996年「第7回写真ひとつぼ展」グランプリ、「第13回キャノン写真新世紀」優秀賞、1998年「第9回コニカ写真奨励賞」、2001年「第26回木村伊兵衛写真賞」、2006年第13回VOCA展2006「大原美術館賞」など数々受賞。国内外を問わずエディトリアル、広告、映像などをクリエイティブディレクションから手掛けるスタイルで注目を集めている。またシリーズやマスターマインドなど国内外を問わず、ファッションブランドとのコラボレーションも多い。現在までに開催した個展は70回以上、発表した写真集は60冊以上を数え、国内でもっとも写真集が売れるフォトグラファー。2008年から2010年にわたり開催された大規模な個展「蜷川実花展一地上の花、天上の色一」は東京、岩手、鹿児島、兵庫、高知の美術館を巡回。東京、鹿児島では最多動員数記録を更新し、合計18万人を動員した。2010年にはRizzoli N.Y.から写真集「MIKANA INAGAWA」を出版、世界各国で話題となっている。

SARVH

プロデューサー賞

亀山千広

『踊る大捜査線 THE FINAL 新たなる希望』『テルマエ・ロマエ』『BRAVE HEARTS 海猿』
『ロボジー』『라이어ゲーム -再生-』『終の信託』『任侠ヘルパー』『JAPAN IN A DAY（ジャパン イン ア デイ）』



受賞者プロフィール

1956年、静岡県生まれ。株式会社フジテレビジョン 常務取締役 総合メディア開発 映画事業局長
早稲田大学在学中に、映画監督・五所平之助の書生を務め、映画製作を経験する。1980年フジテレビ入社後、編成部および第一制作部（現在のドラマ制作センター）を経て、編成制作局局長に。代表的なドラマプロデュース作品に、「ロングバケーション」「ビーチボーイズ」「踊る大捜査線」など。2003年よりフジテレビ映画事業局長とし

て、「踊る大捜査線」シリーズをはじめ「海猿」シリーズ、三谷幸喜監督作品、「テルマエ・ロマエ」などの製作を手がける。

『ロボジー』 製作（矢口史靖監督） 1/14 公開
『라이어ゲーム -再生-』 製作（松山博明監督） 3/3 公開
『テルマエ・ロマエ』 製作（武内英樹監督） 4/28 公開
『BRAVE HEARTS 海猿』 製作（羽住英一郎監督） 7/13 公開
『踊る大捜査線 THE FINAL 新たなる希望』 製作（本広克行監督） 9/7 公開
『終の信託』 製作（周防正行監督） 10/ 2 公開
『JAPAN IN A DAY（ジャパン イン ア デイ）』 エグゼクティブプロデューサー（フィリップ・マーティン監督/成田岳監督） 11/3 公開
『任侠ヘルパー』 製作（西谷弘監督） 11/17 公開

審査員講評

金賞・銀賞選考委員講評

審査委員長：梶井省志（アルタミラピクチャーズ）

今年度の新人監督作品は合計 139 本にのぼり、昨年に比べ更に増えています。しかし残念ながら今年度、新藤賞の選考対象に上がった作品は決して多くはありませんでした。

その中で選考者の多くの支持を得たのが、金賞に選ばれた赤堀雅秋監督の自身の戯曲を映画化した「その夜の侍」で、舞台演出家としての力量を遺憾なく発揮した力作です。観る者を息苦しくさせるほどのリアルな凝縮感の中にあってふと時々くらくら肩透かしみたいなもの、言わば非リアルなもの、それが演劇に身を置く赤堀監督の個性でしょうか。次回作では、その個性を生かして、ぜひ映画書きおろし作品を期待しています。

銀賞の蜷川実花監督は既に写真家として高い評価を得ていますが、長年持ち続けた自身の企画をついに実現したのが、「ヘルタースケルター」だと聞いています。めくるめく色彩と造形の万華鏡のような空間の中で自由奔放に体当たりの演技に挑む俳優陣、蜷川監督はあふれんばかりのパワーで映画というフィールドを思う存分に駆け巡り楽しんでいるように思われました。受賞者兩名とも映画畑の出身ではありませんが、それが却って新鮮な個性となって評価につながったと思います。

また、残念ながら最終的に選にはもれましたが、最後まで選考の机に残ったのがヤン・ヨンヒ監督の「かぞくのくに」です。北朝鮮という近くて遠い未知の国の不条理を、センセーショナルに陥ることなく端正に理知的に描いた心に残る作品でした。また、大きな興行成績を収めた武内英樹監督の「テルマエ・ロマエ」、三木孝浩監督の「僕等がいた」、大友啓史監督の「るろうに剣心」など、商業的映画製作の場でも新人監督の活躍がめざましく、その成功は評価されるものです。ここに名を連ねた監督は間違いなく今後の日本映画を支える人材であり、新藤兼人監督に自信を持って報告することができます。ただ、今年は、受賞者と共に我々が毎年一番楽しみにしていた、新藤監督の愛情に満ちた総評が聞けない寂しい年となってしまいました。ここに改めて新藤兼人監督のご冥福をお祈りしたいと思います。

川崎 隆（ユニークブレインズ）

『その夜の侍』赤堀雅秋監督、『ヘルタースケルター』蜷川実花監督、おめでとうございます。作品の出来の良し悪しは、映画の作られる環境によって左右されがちです。そうした環境のなかで、作品が監督の作家性によって創作されたか、観客をきちんと意識して作られたか、将来映画界を背負っていける力と志があるか、もっと言うと、我々が育てていかなければならないと思われる人を選んだつもりです。

今年も多くの新人監督がデビューし、作品が生まれました。一口に新人監督といっても、テレビドラマで豊富な経験をお持ちの方から、本当に初めて映画を撮った方まで、またメジャー資本のバックアップの作品から手弁当で撮ったであろう作品まで様々ありました。これらの作品を同じ俎上に載せて、賞の選考対象にすることの難しさを感じながらの一年でありました。他の監督も力のある方はおりました。『かぞくのくに』ヤン・ヨンヒさん、『東京プレイボーイクラブ』奥田庸介さん、『毎日がアルツハイマー』関口祐加さん、『DON'T STOP! ドント・ストップ』小橋賢児さん、次回作を期待したいと思います。

豊島雅郎（アスミック・エース）

赤堀雅秋初監督作品『その夜の侍』には正直唸りました。まず観終わってすぐに思ったことは「この監督と仕事がしてみたい!」。第52回岸田國士戯曲賞にノミネートされた自身による戯曲を映像化の為に自ら脚色し演出もした作品と聞いてはいたものの、オリジナルの舞台は未見であったので世界観に入れないのかも…と思いきや、なんのなんの、映画だけでも見事に成立した、今年の多くの候補作品の中でも、パワー、完成度どれをとっても断トツの作品でした。赤堀監督、金賞受賞おめでとうございます!

処女作『さくらん』から5年ぶりの新作『ヘルタースケルター』で栄えある銀賞をいただいた蜷川実花監督については、自分が関係者だけに評価し難かったのは確かです(笑)しかしながら、客観的にも、“ニナミカ”ワールドのオンリーワンな映像世界は、今回の賞に値するものだと思自負もしていますし、「2012年夏に数多くの若い女性を熱狂させた、エポックメイキングな新種の任侠映画」だったのかな、と思ったりもしています。推していただいた審査委員長を始め3名のプロデューサーに感謝したく思います。

他候補作品では、ヤン・ヨンヒ監督『かぞくのくに』、鈴木太一監督『くそガキの告白』の両作品が、共に監督自身による企画力・提案力が強く印象に残る、素晴らしい作品であったことも最後にノートしておきたいと思います。

成田尚哉（アルチンボルド）

「その夜の侍」に新鮮な驚きを感じました。シナリオ的には必要と思われる部分をばっさりとオフにしたり、時間軸の操作も何処かぎこちない印象を与えもするけど「復讐劇」としてのサスペンスを武器に、鋭利な彫刻刀で人物を彫りあげるような鬼気迫る迫力がありません。安易なヒューマニズムやどこかで見たような予定調和を絶対に拒否するぞ、といった作者の思いが伝わってくるようでした。

「ヘルタースケルター」は賛否両論でしたが、まさにそのことこそが映画の可能性を開くことになるのだと思いました。蜷川監督でなければ表現できない映画がここにありません。「アート映画」という括り方には違和感がありますが、興行的に十分な実績を残したことも評価されるべきだと思います。日本映画界で、他の誰にも似ていない映画を生み出せる才能として次回作が楽しみです。

選に漏れましたが、ヤン・ヨンヒ監督の「かぞくのくに」が印象的でした。重いテーマを声高ではなく語る姿勢に共感を覚えましたが、別テーマでの新作に期待したいと思いました。

SARVH プロデューサー賞選考委員講評

日本映画製作者協会 理事 榎井省志（アルタミラピクチャーズ）

亀山千広氏は、『踊る大捜査線』シリーズのプロデューサーとしてこの15年間、日本映画に新風を吹き込み、業界を牽引して来られました。

そして本年は特に製作者として、『海猿』シリーズの引き続きの成功、『ジャパン イン ア デイ』での新たな試み、そして『終の信託』の通常テレビ局映画として手の出しにくい重いテーマ性の作品をも果敢に製作し、テレビ局の立場を超えて日本映画の幅と奥行きを広げることに大きな貢献を果たされました。また、局内の映画プロデューサーの若手育成にも積極的に取り組み、そのたゆみない努力から生まれた企画が稲葉直人プロデューサーの『テルマエ・ロマエ』であり、大きな成績を収めました。映画製作者としてまたフジテレビ映画チームの代表者として、これらの功績は賞賛に値します。これからも、ますます、日本映画界のためにご尽力されることを願います。